

多くの日本人にとって、コーヒーを飲む際のBGMは、ロバータ＝フラックの歌った「やさしく歌って」(大手コーヒーメーカーがCMに使った)だが、ここ富良野では、平原綾香の「約束」である(TVドラマ「優しい時間」のテーマ曲)。

飲むべき場所も決まっている。それは、喫茶「森の時計」のカウンターであり、テーブル席ではない。豆は自分でミルを回して挽かなければならず、挽いた豆の香りを確認した上で、マスターの寺尾聡(ドラマのつもり)にドリップしてもらうのがここの作法だ。

「ずっとそばに居るとあんなに言ったのに、今は一人見てる夜空、はかない約束」カウンターの隅の席は大竹しのぶ(やはりドラマの中だけ)の予約席のはず、ドラマのシーンに浸りながら目をやると、いかにもミーハーな家族連れが交替で席に座り、写真を撮りまくっている。

実は、私もこのカウンター席を確保する為に行列の後ろに並んだミーハーの一人である。かように今の日本人はメディアの力に弱い。自分で豆なんか挽くのは本来億劫だし、BGMだってクラシックやジャズなどにお洒落なものはいくらでもあるはずだが、ここではドラマに使われた曲がエンドレスに繰り返されるだけ。豆をお客に挽かせた上に、BGMは1種類。こんな怠慢(?)な店が、恐らく今日本では一番写真撮影の多い喫茶店なのである?

今回の富良野訪問で、やはりメディアを活用した情報発信戦略が如何に重要であるか確信を深めるに至った。富士宮やきそばもメディアに大量な話題提供を行うことにより商標登録も可能となったのだから、ある意味戦略的には富良野と共通するところが多いと思うのだが、両者のイメージの違いは大きい。

BGMが「やきそば音頭」では「優しい時間」と言うよりも「賑やかな時間」だし、寺尾聡のように寡黙なマスターが焼いてくれたやきそばでは美味そうではない。カウンターの隅に陣取るのは大竹しのぶではなく、酔っ払いの大虎?しのぶの方が富士宮やきそばらしい気がする。

私が残念で仕方がないのは寅さん(渥美清)が亡くなってしまったことだ。門前町の人情味溢れる駄菓子屋(やきそば屋)でおばちゃん相手にコップ酒というスタイルが様になる役者が他にいるだろうか?寅さんシリーズを富士宮で製作出来れば更にすごいことになっていたはずだが、無いものねだりをしても仕方がない。富士宮は富士宮らしく多少柄が悪かろうが今の路線を続けるしかないだろう。

肝心なことを忘れていた、富士宮と富良野の最も大きな違いは、仕掛け人＝プロデューサーの違いであった。言い換えるならば「やきそば学会」と「富良野塾」の違いである。富良野側からは並べられるだけでも不本意だろうがご容赦願いたい。

そんな一流ブランドの富良野が「富士宮に続け!」とばかりカレーでまちおこしに取り組んでいるのだから、大虎しのぶも捨てたものではない。今回の富良野訪問とラジオふらのへの出演がご縁で倉本先生が富士宮を舞台にしたドラマでも書いてくれないだろうか?などと一方的におめでたいことを考えている自称富士宮の脚本家＝倉本うそなのであった。

富士宮やきそば学会 会長 渡辺英彦